

平成4年度(1992)  
個展を前提とした作品制作研究(10)  
第10回個展・Gallery Work II in Naha

金城 満

1. 展覧会名:

金城満展・痕跡のあと

2. 趣旨:

「描いても、描いても、描ききれないもの」、「消しても、消しても、消し去れないもの」、痕跡はやがて消え去るが、それでも残るものそれを「痕跡のあと」と呼びたい。

3. 材料技法

ナンピ材、ニカワ顔料、箔、テンペラ、油彩

4. 展覧会場

Gallery Work II

5. 展覧会期

1992年11月09日（月）～21日（土） ※12日間

6. 開館時間

11:00～19:00

7. 観覧料金

無料

8. 企画

Gallery Work II

## 9. 作品リスト

No.	作 品 名	サイズ(cm)	材 料	制作年月	備 考
141	シリーズ「痕跡のあと」I	83.0 x 116.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
142	シリーズ「痕跡のあと」 II	83.0 x 116.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
143	シリーズ「痕跡のあと」 III	99.0 x 136.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
144	シリーズ「痕跡のあと」 IV	116.0 x 136.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
145	シリーズ「痕跡のあと」 V	116.0 x 136.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
146	シリーズ「痕跡のあと」 VI	116.0 x 136.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
147	シリーズ「痕跡のあと」 VII	116.0 x 136.0 cm	ナンビ材、ニカワ、顔料、箔、 テンペラ、油彩	1992年	第10回個展
148	シリーズ「痕跡のあと」 VIII	133.0 x 406.0 cm	杉材、ニカワ、顔料、箔、テ ンペラ、油彩	1992年	第10回個展

## 10. 関連イベント

アーティストトーク

## 11. 考察（報道等資料）（pp. 14-18）

(1) 「痕跡のあと」について 金城満

(2) 沖縄タイムス 1992. 11. 21 展評/「工工四」をプリント

金城満展 「痕跡のあと」シリーズ個展 （学芸部/真久田巧記者）

(3) 沖縄タイムス 1992. 12. 06 11月美術月評

求心的かつ構築的 発色抑え重厚感を現出 （翁長直樹）

MITSURU  
EXHIBITION

1992  
11/9~21

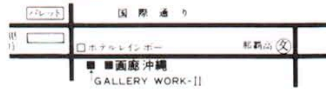
GALLERY WORK-II  
2-2-4 IZUMIZAKI NAHA  
OKINAWA JAPAN 〒900  
Phone 098 (855) 7933



金城 満 展

1992年11月9日(月)~21日(土)  
(15日(日)は休廊)

画廊 沖縄 那覇市泉崎 2-2-3  
AM10:00~PM7:00 ☎098(834)6760  
GALLERY 那覇市泉崎2-2-4(画廊沖縄トナリ)  
WORK-II AM11:00~PM7:00 ☎098(855)7933  
(日曜日は定休日です)

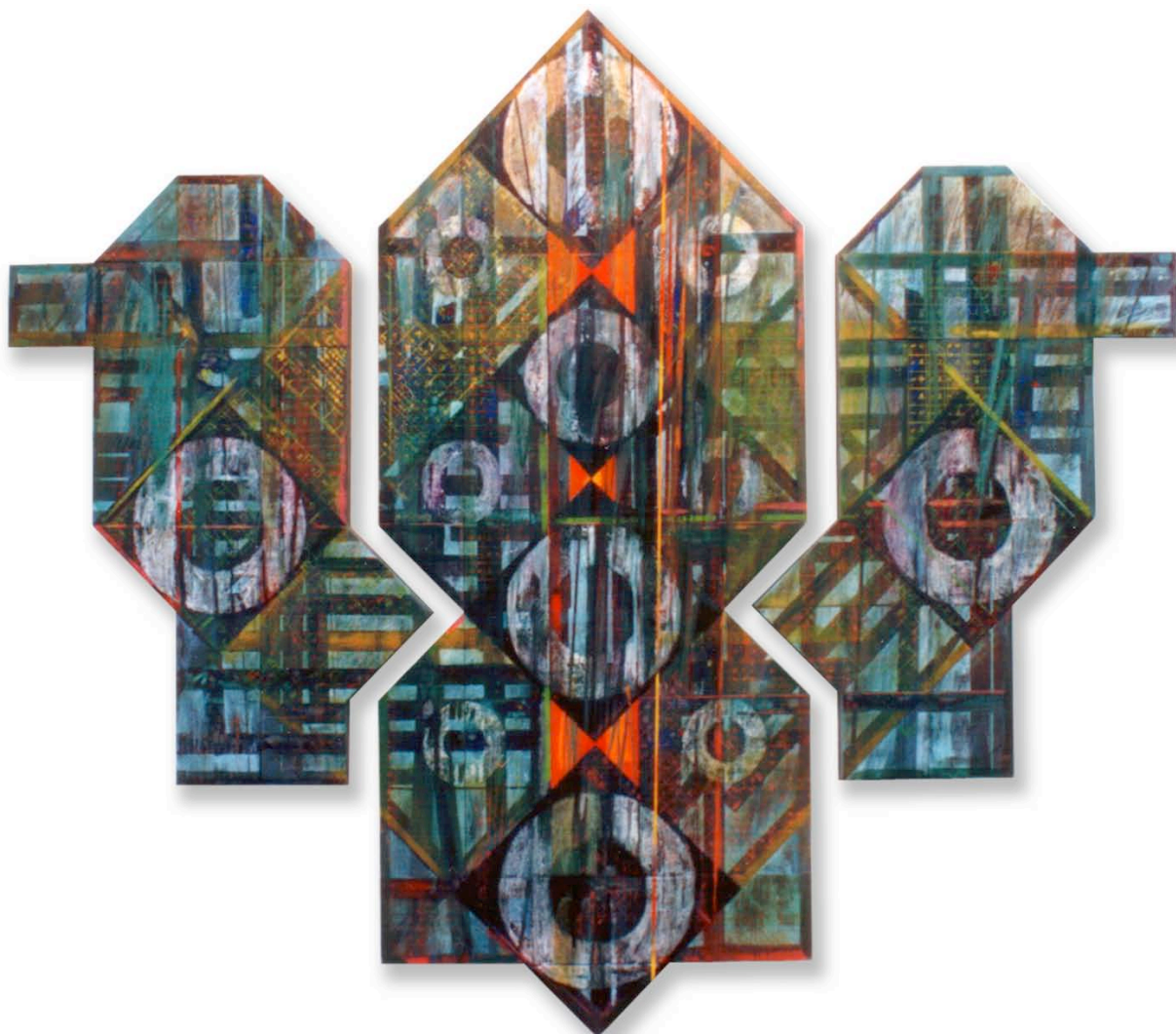




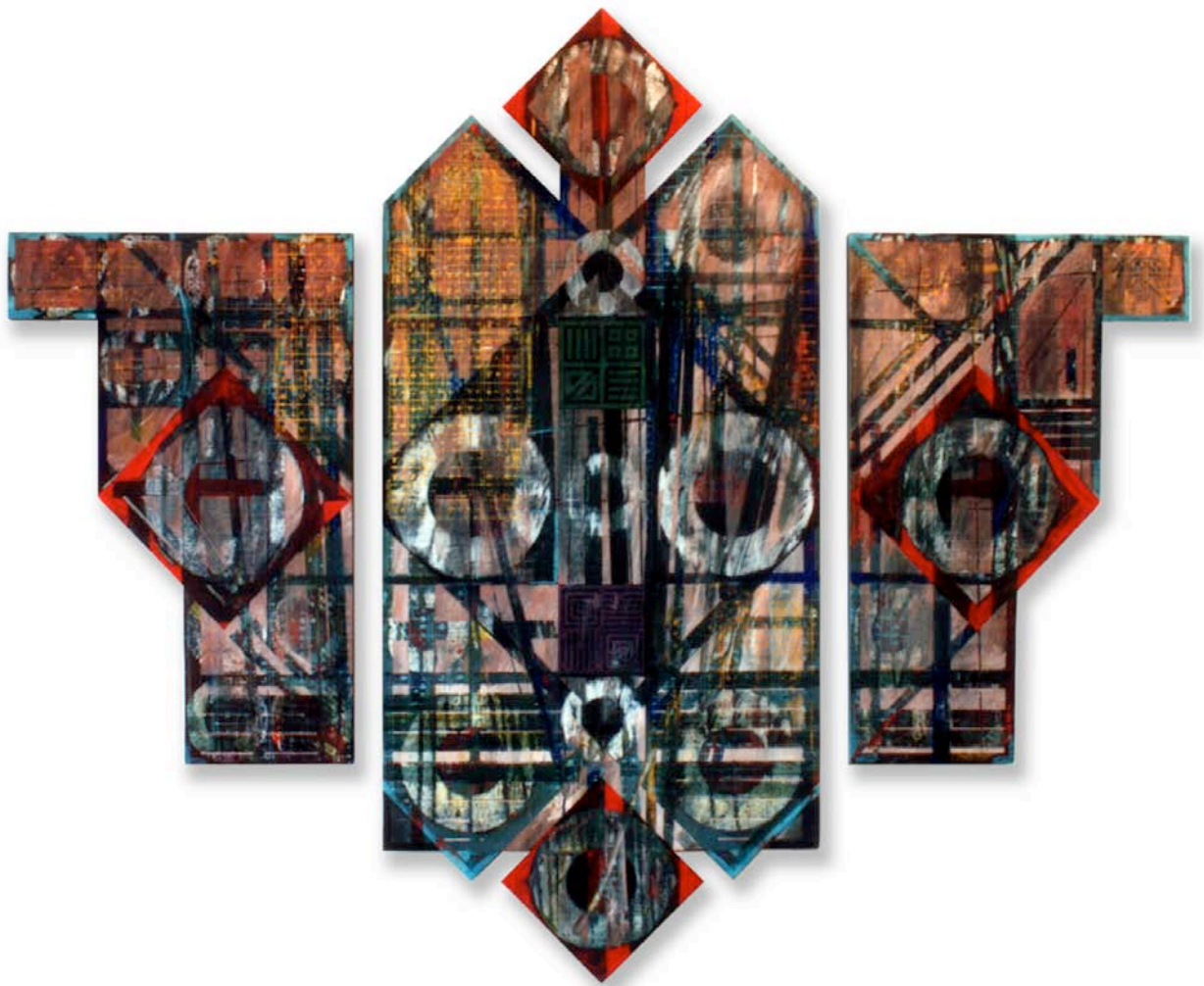
シリーズ「痕跡のあと」I  
83.0x116.0 cm 1992年  
ナンピ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩



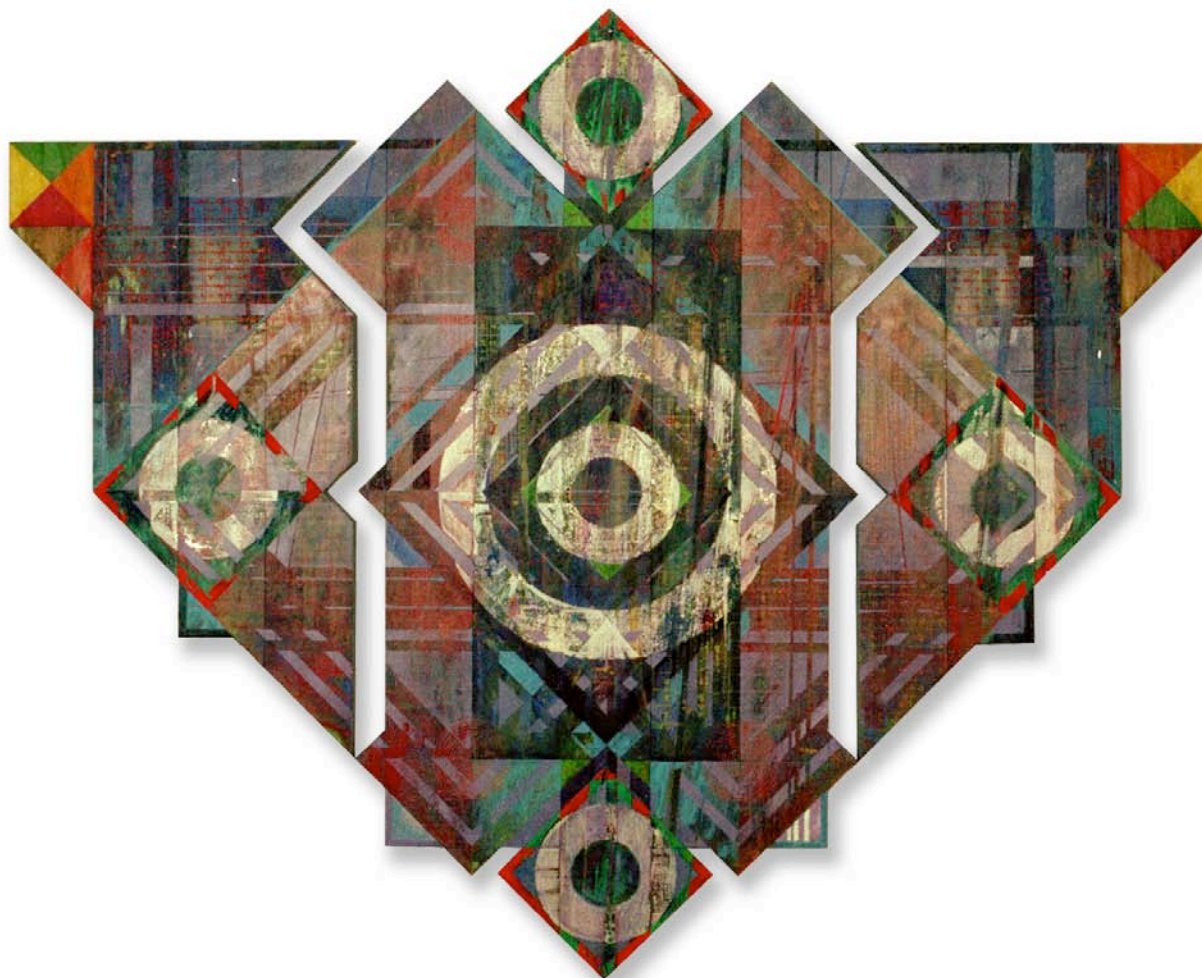
シリーズ「痕跡のあと」Ⅲ  
99.0x136.0cm 1992年  
ナンピ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩



シリーズ「痕跡のあと」V  
116.0x136.0cm 1992年  
ナンビ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩



シリーズ「痕跡のあと」Ⅳ  
116.0x136.0cm 1992年  
ナンピ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩

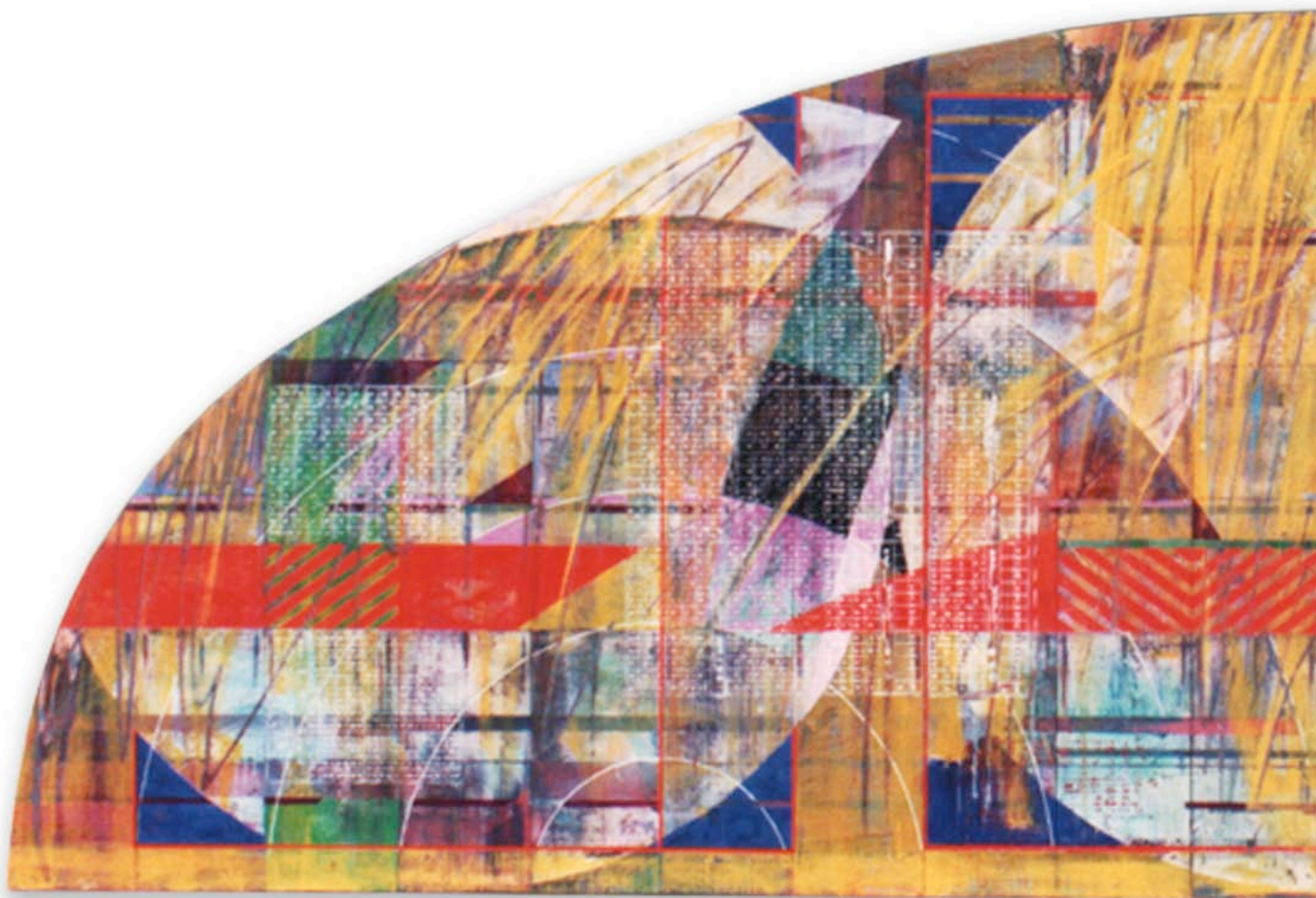


シリーズ「痕跡のあと」VII  
116.0x136.0cm 1992年  
ナンピ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩





シリーズ「痕跡のあと」VI  
116.0x136.0cm 1992年  
ナンピ材、ニカワ顔料、箔、  
テンペラ、油彩

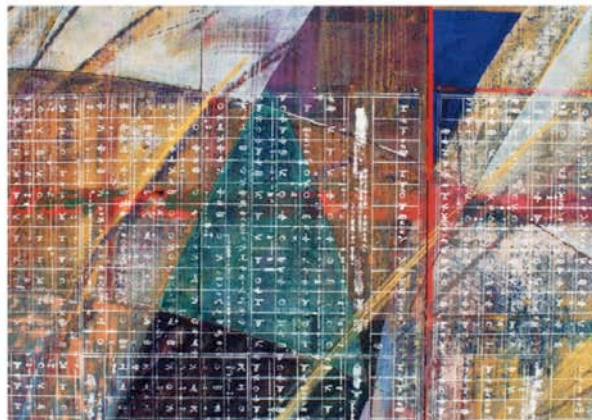
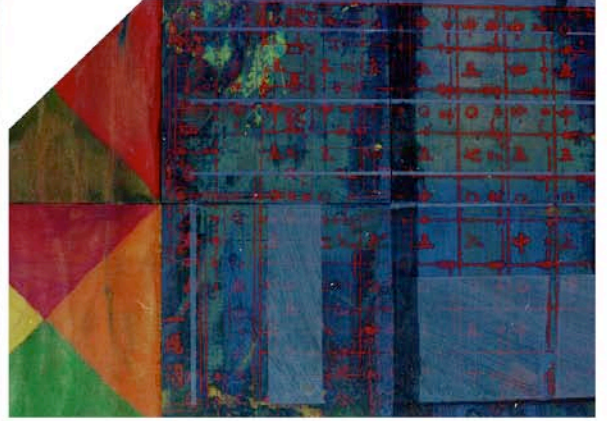




シリーズ「痕跡のあと」VIII  
133.0x406.0cm 1992年  
ナンピ材、ニカラ顔料、箔、  
テンペラ、油彩（同時期）



シリーズ「痕跡のあと」Ⅱ  
83.0x116.0 cm 1992年  
ナンピ材、ニカラ顔料、箔、  
テンペラ、油彩



## 「痕跡のあと」について

「描いても、描いても、描ききれないもの」、「消しても、消しても、消し去れないもの」、痕跡はやがて消え去るが、それでも残るもの。それを「痕跡のあと」と呼びたい。人間そのものを、点ではなく上下左右厚みへの座標そのものとしての実感を、私自身強く持ちたい為の表現である。

支持体に板を使った理由としては、「表面の厚み」が欲しかった為である。それは、単に物質的なものだけをさすのではなく、表面に出てきた表面と、重なりあい層をなした表面、いわゆる見えない部分の表面をさし、前記した「点を表面」と定義した場合に「座標としての表面」を意味する

ここで、座標についてもう少し詳しく述べると、現在、私たちが生きていることを、高層建築の10階部分だとしよう。階数は世代を意味しどの部分を土から1階と数えるかは、「生命」そのものをどうとらえるかによってくる。そしてまた、地下部分に何階あるのか、どのような構造になっているのか、この問題は自分自身の根っこが水脈、土脈をどのように這ってきているのかを掘り起こすことである。

床の下は見えないし、天井の上もまた見えない。しかし、「気配」を感じる手段は幾つかある。人によっては、ルーツを探す旅にでるだろうし、家系図を辿っていく人もいる。また、科学的な方法をとる人は、遺伝子による辿り方をするだろう。私の場合その手段が絵画表現であって、絵画すること、及びその周辺が、座標へ入り込む為の隙間を見つけだす行為であり、「痕跡のあと」を探し、創ることである。

以上の理由から「板」の持つ性格として、サブタイトルにもある、

——切断、削り、引っかき、及び金属材料との混合技法——

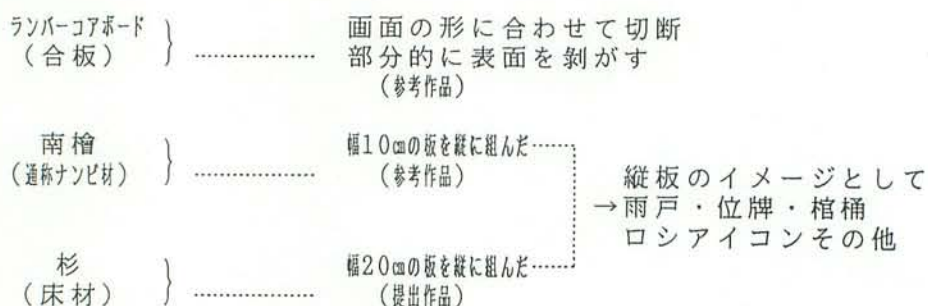
により、「絵画としての表面」と「座標としての表面」を関係づけた表現をした。

具体的には、絵の具のメディウムを水性（ニカワ）、両性（卵）、油性（樹脂油）、の3種類を使い分けることにより、描き加えるだけでなく絵の具層を洗う、溶かす、拭き取るといった痕跡をつくる。それと並行して金属材料である箔で逆に表面から浮かせ、釘ですべてを打ち込んでいく。

画面の組み立てとしては幾何学的な秩序（比率）を元につくっていくわけだがその後、徐々に崩れながら、新たな秩序を生み出していく。

幾何学的なものから出発していく理由として、数的に測定でき、「見える形であり」「聴ける音」であるからだ。言い換えれば、「網膜の外、鼓膜の外」である。よって私自身の「内への座標」を触発していくものとしての出発点であり、板、絵の具、箔、釘も、同じ意味を持つ。

## 1. 経過——使用した板の種類から——



## 2. 制作過程から材料、テーマを考える

制作過程は大きく分けて次の5つの段階を前後しながら進んでいく。



絵の具のメディウムを水性（ニカワ）、両性（卵）、油性（樹脂油）、の3種類を使い分けることにより、絵の具と支持体の可能性を上げたかった。

まず、吸水性の石膏下地を施したボードにニカワで練り込んだ顔料を、何層にも重ねていき、水で拭き取ったり、グラインダーをかけたりにして絵の具を剥した後箔を貼る。そのため、箔で、それらの質感とは対照的に幾何学的な秩序（比率）を元に画面をつくっていく。

その後、徐々に崩れながら、新たな秩序を生み出していくわけだが、それはちょうど、コンクリートの壁に走ったひび割れの線が、ある秩序の元にあるように進む。

では、なぜ幾何学的なものから出発していくのかと言うと、数的に測定でき、「見える形であり」「聴ける音」であるからだ。言い換えれば、網膜の外であり、鼓膜の外である。よって私自身の「内」を触発していくものとしての出発点であり、板、絵の具、箔の剥離も、同じ意味を持つ。

以上の過程で、削る、引っかく、拭き取る・・・などの行為は、テーマである、シリーズ「痕跡のあと」と結びつく。

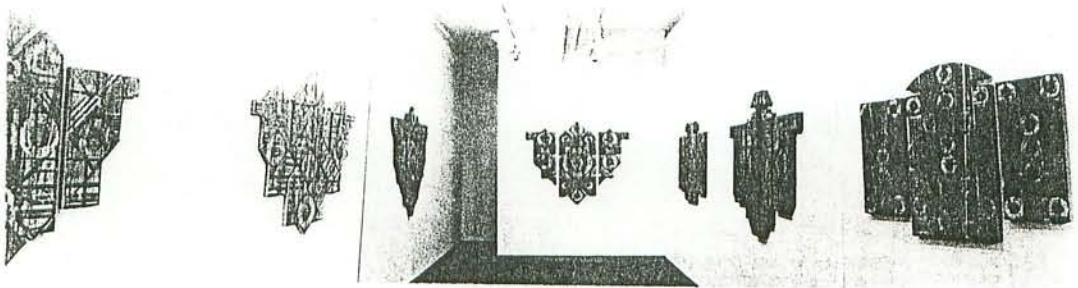
「描いても、描いても、描ききれないもの」、「消しても、消しても、消し去れないもの」、痕跡はやがて消え去るが、それでも残るもの。それを「痕跡のあと」と呼びたい。人間そのものを、点ではなく上下左右への座標そのものとしての実感を、私自身強く持ちたい為の表現である。

ナンピ材使用の参考作品

①	シリーズ「痕跡のあと」 I	83×116cm
②	” II	83×116cm
③	” III	99×136cm
④	” IV	116×136cm
⑤	” V	116×136cm
⑥	” VI	116×136cm
⑦	” VII	116×136cm

---

①～⑦の材料：ナンピ材、ニカ、顔料  
管、テンペラ、油彩







十一月は首里城開園に沖縄中が揺れた。復帰二十周年記念として、さまざまな芸能や

学術シンポジウムがそれに連動する形となり、さながら「琉球」の時代を思わせた。この自民族中心主義（エスノセントリック）な風潮が見えざる手によって仕掛けられているとすればどうだろうか。もっと現実をしっかりと見据える目を持つ必要があるうと思えた。

# 美術月評

翁長 直樹

〈11月〉

## 金城満展

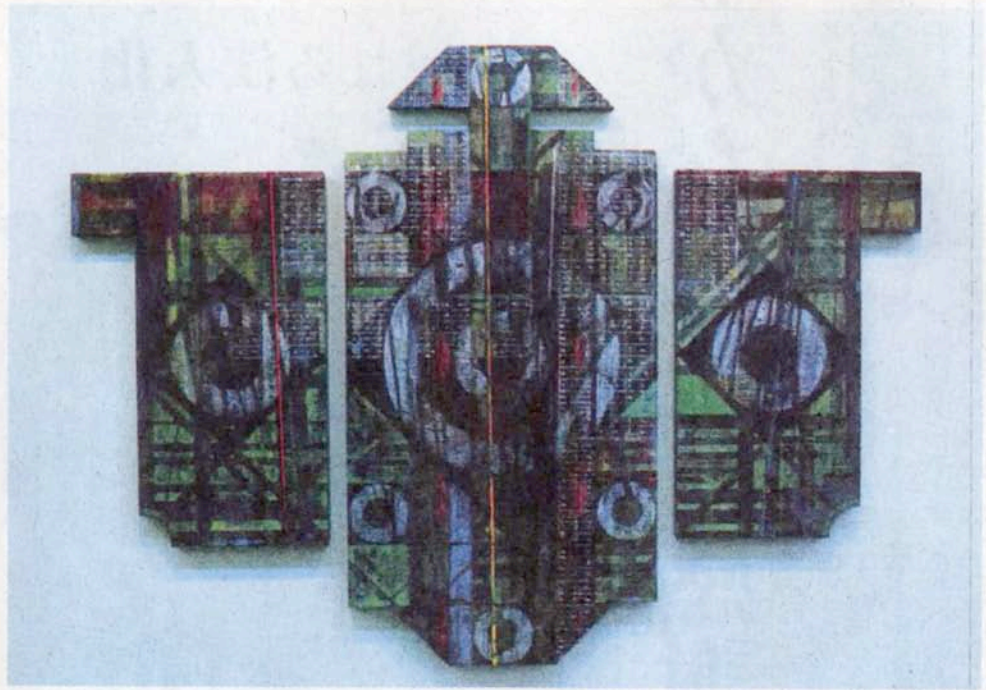
### 求心的かつ構築的

#### 発色抑え重厚感を現出

心的になり、構築的になってきた。支持体も合板から厚みのある一枚板に変わり、板の上に着色、形状もまるで一枚のパネルを三つのパーツに切り分けたようである。

自在な曲線と横断的な線は影をひそめ、大小さまざまな矩（く）形と円が前面に表れるようになった。技法的にはテンペラと油彩、金銀箔（ほく）その他の混合技法であるが、かなり色を重ねたり削ったりすることによって発色を抑え、重厚感を現出させている。どこかマンダラ図を思わせる作品は、以前の野放図とも思える越境や侵犯のイメージから、重厚な時間の暗夜に鍾鉛を垂れる作業に変わってきたと思える。

昨年二度の個展を三月と十一月に行い、その間いやや大きな変化があった。今回は昨年の十二月の延長上にある。前回までは形が画面をほみだし、色彩も明るかったが、今回はかなり求



金城満作品—ギャラリー・ワークII